

■ PC の孤独



北山 和宏*

本工学会においてPCといえばプレストレスト・コンクリートのことである、あたり前である。しかし世間一般ではこの略称は通用しない。PCといえば通常はパソコンのことであろう。では建築の世界ではどうだろうか。残念ながらこれも多分に怪しいというのが筆者の長年の経験から得た結論である。

以前に著名な建築家からあるプロジェクトへの参加を打診されたとき、彼はPC建物を対象とするといった。建築作品によって日本建築学会賞を受賞したほどの建築家がプレストレスト・コンクリート建物についてのプロジェクトを立ち上げることに感激した筆者は、即座に参加を表明した。しかしその後詳細を聞いて分かったのだが、その建築家はプレキャスト・コンクリートのつもりでPCという用語を使っていたのである。

わたくしのようなコンクリート系構造の専門家はプレキャスト・コンクリートはPCaと表記して厳密に区別することが多い。しかし普通の建築設計者にとってはPCaという表現に馴染みはなく、PCといえばプレキャスト・コンクリートのことをさすのが通常なのであろう。

プレストレスト・コンクリート構造では、プレキャストの鉄筋コンクリート部材（柱や梁）をPC鋼材によって緊結して一体化した骨組を構築する工法がある。このように書くのは煩雑なのでこれをPCaPCと表記することが多く、わたくしも愛用している。本誌の読者であればああ、あれかと思われることだろう。さらに、シース管へのグラウト注入を行わずにアンボンドのPC鋼材を使う場合には、これをアンボンドPCaPCと表記することもある。しかしながらここまで来るとこれを理解できるのは一部のマニアックな専門家だけであって、そのほかの大多数のひとには通じないのだと思う。

プレストレスト・コンクリート構造にかかわるこれらの略号が市井のひとびとに理解されないのは、まあ仕方ないことと諦めよう。しかし建築専門者の多数にとっても未知であるというのは問題ではないだろうか。

本工学会で建築に携わる方が異口同音に指摘されて

いるが、プレストレスト・コンクリート構造そのものが建築家たちのあいだにそもそも認知されていない。よほど建築構造に詳しい、ある意味珍しい建築家がこれを使うくらいであろう。そのような貴重な建築家のひとりとして内藤 廣さんがいる。

七年前のことになるがJCIの「プレストレス技術の有効利用研究委員会」（委員長：西山峰広・京大教授）の報告会で内藤 廣さんに特別講演をお願いした。そのなかで彼は、プレストレスのような優れた技術をそろそろ文化にまで高めるべき時代に入ったとか、プレストレス技術をもっと建築家にアピールする努力をするべきである、と指摘された。

このようにプレストレスト・コンクリート構造を理解して、これに対してエールを送ってくれる建築家を大事にすべきであるし、そういう建築家を増やすようにわれわれ専門家集団が尽力すべきである、ということ自戒を込めて強く感じる。

一流の建築家に知ってもらうためには、まず建築専門家全般に対する教育が大切である。プレストレスト・コンクリート構造に関する大学教育については、本工学会内に設置された「PC構造関連授業の実態に関する研究委員会」（委員長：岸本一蔵・阪大准教授〔当時〕）において詳細に調査された。それによるとプレストレスト・コンクリート構造を半期以上教えている建築系学科はほとんどなく、RC構造の授業のなかで教えているところもわずかであった記憶がある。残念な現状であるが、かく言うわたくし自身もRC構造の講義を担当しているが、プレストレスト・コンクリート構造については学部でも大学院でもまったく教えていない。カリキュラムがすでに一杯で身動きできないというのが正直なところである。

かように問題は多岐にわたるし、その根は深いと言わざるを得ない。わたくしのような大学人のできることにいえば、設計製図のエスキスなどで学生に対してプレストレスト・コンクリート構造の利点を説明して、それを導入することによって解決できる諸問題を個別に丁寧に説明することくらいだろう。プレストレスト・コンクリート構造の周知に向けてこれからもできるところで努力しようと思う。

* Kazuhiro KITAYAMA：首都大学東京 建築都市コース 教授